博士論文要旨

新たな「地域性」の構築

―1990 年代以降の上海文学におけるノスタルジア・蘇北叙述と文学言語―

賈　海涛

一橋大学大学院言語社会研究科博士課程

LD191007

2023 年 6 月提出

本研究の目的は、1990 年代以降の上海文学における「上海ノスタルジア」、「蘇北叙述」と文学言語を検討の対象とし、その分析を通じて、均質化が要請される「近代」という空間的・言語的・制度的構造に対して批判・抵抗する「新たな地域性」の可能性を究明することにある。

1990 年代以降の上海は、1980 年代の経済停滞期を経て、1992 年鄧小平の「南巡講話」と「浦東地区開発」を機に、市場経済とグローバル化が進み、高度経済成長期を迎えた。しかし、同時に、地域の独自性の強調は、都市化とは相容れないものとして、言説空間において後景に退くことになった。1990 年代中後期以降、このような状況に対して、上海の地域性を再考・再評価する風潮の一環として、上海の歴史や文化を題材とする都市文学が盛況を呈していた。

本研究の分析対象となる「上海文学」については、(1) 上海に長く定住した経験を持ち、上海語を熟知した作家による作品、(2) 上海を舞台にした作品、という二点のどちらか、もしくは両者を兼ね具える、という条件を満たした作品と定義する。本研究では、そうした上海文学のなかで蓄積されていた新たな「地域性」とそれに関する様々な表象、即ち文化記号の構築、移住者像、現実的な言語環境などの外的な文脈と、語りのスタイル、文体や文学言語などの内的要素との相互作用という検討領域を設定する。

また、このような新たな「地域性」の構築が、近代文学・言語の原理的探求を意識しつつ、「文学」という制度的な構造に、どのように新たな可能性を示唆しているのかを考察することも目的とする。上海文学における地域性に関する従来のいわゆる「地域文学」研究は、地域性すなわちその地域ならではの「自然的要素＝物質」と「人文的要素＝精神」を内包する諸要素が、文学テクストでいかに再現・表象されているのかという問題に注目してきた。そこで注目された地域性とは、往々にして作家や作品に先立つ所与の存在として、他地域との差異性に基づいて、その地域の文学をはじめ、言語状況や文化民俗などのあらゆる側面に浸透している、と想定される「本質としての地域性」である。

そのため、本研究では、「本質としての地域性」を反省しつつ、方言語彙や構文を文学テクストに取り入れる際の表記や文体としての文学言語を分析対象とした。また、郷土性に基づいた郷土文学ではなく、近代都市という重層的な地域空間を舞台にした都市文学の中で、再び新たな「地域性」を考えることは可能であろうかという問いについて、本研究は、その可能性を引き出そうとする試みでもる。

本研究は序章と終章を除くと四章に内容が分けられている。各章の内容と結論を

要約すると以下のどおりである。

本研究の前半、第一章と第二章は、それぞれ「内部」と「外部」をめぐる言説の両極に置かれた、「上海ノスタルジア」と「蘇北叙述」を分析した。

第一章では、「上海ノスタルジア」を扱った文学作品を、「内部」の歴史の断片に関する「解説」を集約し、上海の「辞書」を積み上げることで、反都市イデオロギーに遮蔽されていた上海の文化記号を、再び文学テクストに織り込むという試みの一環と位置づけた。その位置づけから、「上海ノスタルジア」は反都市イデオロギーに対して抵抗するという「反省的なノスタルジア」の側面を持つことを確認した。

一方、「上海ノスタルジア」と同じコンテクストに置かれた短編小説集『城市地図』には、様々な場所の移動を取り入れたエピソードを通じて、「外部」と「内部」における場所間のせめぎ合い、また両者の格差に伴うアイデンティティや価値観の揺らぎが描かれていることを指摘した。このような異なる認識の競合は、再都市化に直面する上海に「外部」と「内部」という単純な二項対立の図式には収まらない混種的で流動的な部分があることを示すものであると指摘した。

第二章では、上海の文化論的言説において排除された「蘇北」を文学のナラティブに取り入れた「蘇北叙述」は、どのように移住者のアイデンティティや集合的記憶、職業像と言語使用を表象しているのかを考察した。

まず、上海の蘇北移住者は、統合的なアイデンティティあるいは共同体への帰属感を持つわけではなく、都市各層の人々と接触しやすい職業に従事することで、同郷コミュニティの共同性を相対化しうる流動的な「個人」として、上海の日常生活に緩やかに溶け込んでいったということが、「蘇北叙述」に属する諸作品において描写されていた。

次に、「蘇北叙述」の諸作品は、「解説される方言」と「再現される方言」を通じて、移住者社会としての上海における言語／方言のバリエーションが表現されていることも「蘇北叙述」テクストの特徴であることを指摘した。そして、上海文学は「上海語」で書かれ、「上海人」の何らかの特性を反映すべき、という「本質としての地域性」観念に基づいた従来の固定観念を、「蘇北叙述」は超越していることを明らかにした。

以上の事例から、本研究で構想する新たな「地域性」は、反省的かつ流動的な視点で捉えられる概念になるであろうことが予想されるに至った。上海文学から抽出できる「地域性」とは、本質化されがちな地域文化的言説の枠内に潜んでいる保守的で排他的な傾向を意識しつつ、文学のナラティブによって異質性を可能な限り包

摂しようとする反省的かつ流動的な「地域性」であり、そのような「地域性」とは、安定した構造体として捉えられる観念ではなく、多様な移住者や重層的な文化のるつぼにおいて、摩擦や軋轢を生みだしながら様々な文化が互いに浸透し合っている「中間地帯」にあって、終始自己更新し続ける文化形式によって表象される特質であるとの仮説が浮上してきたということである。論文の後半はこの仮説の論証である。

本研究の後半、第三章と第四章は、従来の地域研究において「本質としての地域性」を表象する媒体としての方言ではなく、国民国家が制定した共通語がもたらした「言語的均質化」に抗う表記や文体としての方言というものが、どのように上海文学のテクストに持ち込まれたのかという問題に焦点を当てた。

第三章では、上海出身の作家・夏商の『東岸紀事』を主な事例にし、任暁雯『浮生』、王小鷹『長街行』を参照しながら、「版本批評」の方法論を導入することで、作品の方言使用、表記、話法、規範的言語と方言との融合、叙述文と会話文の配置といった文体的特徴を考察した。各版の字句異同の比較から、親戚の呼びかけ表現・罵り言葉や熟語といった限られた種類の語彙の他、『東岸紀事』は基本的に叙述文に規範化された表現、会話文に方言語彙という文体の様式分化を作った「叙言分離体」の修正方針を貫徹させていることがわかった。

そして「叙言分離体」成立の歴史的経緯の整理を通じて、叙述文と会話文はそれぞれ抽象性と具象性を目指し、競合しながらも異なる機能を分担しあうような混合的な関係を示していることがわかった。均質的な言語で書かれた中立的な叙述文と、引用符の範囲内で方言語彙を取り込んだ会話文との混在を文体として要請する「叙言分離体」は、近代以降、地域言語の書記、文学言語への取り入れについてのイデオロギー的な対応として広く採用されてきたものである。しかし、『東岸紀事』などの作品において、叙述文に浸透していった限られた種類の語彙からも、「叙言分離体」の規定性を越える方言使用の試み、即ち「方言の越境」という現象が局所的に見られることを指摘した。

第四章では、作家・金宇澄の言語意識と『繁花』の「初稿」を検討対象とし、「初稿」が誕生した「弄堂網」と作者の投稿契機や執筆意識、および方言表記をめぐる議論から金宇澄の言語意識と『繁花』の方言修正について検討した。

まず、「初稿」は一定の文化的均質性をそなえたネット上の言論空間において、上海語を用いて意見交流や情報共有をする環境の中で誕生したものである。『繁花』執筆の端緒となったのは、都市化に伴う地域の均質化に批判的な視線を投げかけ、

オールド上海に関する集団的な記憶を表面化させた雑談であったことを追跡した。

次に、「初稿」の投稿前期では、作者は自らの意図を説明するため、メタフィクション的な要素を持つ会話シーンを作成し、読者に納得してもらう姿勢を持つことを確認した。

さらに、方言表記をめぐる議論において、作者は漢字の表記を柔軟に変換し、共通語と融合させた混成的な表記を創出する、という方言使用の「通文性」観念を提起した。この観念は、文学言語は方言保護・伝承さらに＜規範化＞という方言学の課題から離脱することで、混成的な表記や構文を通じて言語的な均質化に抵抗しようとする発想に基づくものであると考えられる。「通文性」観念に即して作られた方言語彙と自由直接話法の使用によって、『繁花』は最終的に「叙言分離体」が前提としていた規範的な標準化言語の優位性を相対化する、文体横断的な「方言の越境」に到達したことを明らかにした。

本研究が明らかにしてきた「方言の越境」という新たな文体の創出は、文学の言語使用の枠内において既存の言語的ヒエラルキーを転覆させる、そして新たな文学言語の創出の可能性を示すものなのである。とはいえ、それは上海語を上位に置いて新たな言語的ヒエラルキーの正当性と権威を構築することを目的とするものではないことを指摘しておきたい。

本研究では、文体の様式分化が明確な「叙言分離体」から文体横断的な「方言の越境」という方言使用の転換を把握した。とはいえ、筆者はこの転換が進むと文学言語の「最終状態」に接近していく、という「進化論」「終末論」的な観点に与するものではない。また、文学言語は終始排他的な力関係と距離を保ちつつ、語彙・構文・文体の競合と融合、また言語的制度性との対話関係のなかで、多様で混成的な形態を目指す「言語の自由」を追求しつづける存在ともいえる。これらの「言語の自由」を獲得することによって、より個性豊かな文学言語の誕生、またそうした文学言語の発想に基づいて「言語的均質化・規範化」に抵抗する「地域性」観念の構築さえ期待できるのではないか。